

村上華岳の大規模な回顧展が、京都国立近代美術館で開催されている。今回は代表作である《裸婦図》や《日高河（清姫図）》、それに独特的の風景画や牡丹の図、観音像など、多くの初公開作品も含め、初期から最晩年まで約三百点が並ぶ。書や油絵、下絵や書簡類もあわせて展示されていて、華岳の芸術を堪能し、またそのあつたな魅力を発見できる絶好の機会となっている。

# 村上華岳に通う近代詩の空気



村上華岳「牡丹の園」  
(大正6年) =個人蔵

直接五感に訴えてくる。といわけ『驢馬に夏草』は、明治四年の第二回文展で三等賞を受賞した力作で、当時の批評にも、「村上華岳の『驢馬に夏草』は……」頗る上出来で草の描写に多少申分はあるが、不恰好な動物を旨く美化した所は確かに技

明治四一年十月十八日)、「『驃馬に夏草』は「……」新らし  
い感がある」(『美術新報』第七卷第十九号 明治四一年十二月二十日)とあり、青年画家の技量と新鮮な感覚が注目され

人や  
歩く舞女をして安堵  
を追う『日高河』の清姫が、眼  
を閉じてゐる、あるいは閉じて  
いるかのような細い眼をしてい  
るのは、酒や、踊りや、恋が、  
人間を現実から引き離し、異界  
へといざなうものだからだろ  
う。狂おしい恋心に恍惚と身を

まれてゆきそうだ。それは風景であつて別のどこかへ、花であつてさうに別の何かへと、私を連れてゆく。『裸婦図』の前では、ふと、「常によく見る夢乍ら、奇やし、懷かし、身にぞ染む。／曾ても知らぬ女なれど、

「自分は何かしらこの世でな  
木露風（廃園）、「赤色き、  
色赤き花の吐息……」（北原白  
秋『邪元門』）のよつた詩句は、  
そのまま華岳の風景や花の雰囲  
気に通じてゐる。

高階繪里加



たかな・えりか氏 東京大学文  
学部美術史学科卒。同大学院博士課  
程修了。文学博士。2000年から  
現職。著書に「異界の海」芳翠・清  
輝・天心における西洋」、翻訳に  
『北斎百人一首うばがゑどき』『マ  
ネ』『モネ』など。

# この世でないもの。神秘。夢幻

私には、動物たちのやさしげな眼が印象深い。熊や驢馬のどこのか夢見るような眼つきは、のちの『裸婦図』や一連の観音像の半分またを落とした、まどろむような視線に通じるものがある。動物も、観音も、人間から見れば半分異世界に属するものたちだ。そこには言葉はなく、深い感情とそれを伝える眼だけがある。いっぽう、華岳の描く人間たち、『夜桜』の酒を飲む人々や、踊る舞妓、そして安珍を追う『日高河』の清姫が、眼を閉じてゐる。あるいは閉じているかのような細い眼をしているのは、酒や、踊りや、恋が、人間を現実から引き離し、異界へといざなうものだからだろう。狂おしい恋心に恍惚と身をゆだねる華岳の清姫は、走りながら蛇と化してゆくのである（うしなにびく髪の形が、すでにそれを暗示している）。

会場を巡っていると、しだいに、夢の中にいるような不思議な気分にとらえられてくる。『早春風景』や『椎の林』の青い空は、現実のものというよりは、いつか夢に見た異郷の空のように思えてくる。鮮血のように紅くにじむ牡丹の花も、じつと見ているとその中に吸い込まれてゆきそうだ。それは風景であつて別のどこかへ、花であつてさらに別の何かへと、私を連れてゆく。『裸婦図』の前では、ふと、「常によく見る夢乍ら、奇やし、懷かし、身にぞ染みて曾も知らぬ女なれど、

思はれ、思ふかの女よ」という一節が思い浮かぶ。上田敏の『海潮音』が出版され、青年たちの熱烈な支持を受けたのは、華岳十八歳の年であった。明治四〇年前後に豊かな美りを迎えた近代詩の数々は、若き画家の感性の根幹を形づくつたに違いない。今こにないものへの強い憧れと、自らの感情のしたたりをうたう、「風のあゆみ、／静かなる午後の光に、「……」空の色やはらかに青みわたり／夢深き樹には啼く空しき鳥」（三木露風『廃園』）、「色赤き、色赤き花の吐息……」（北原白秋『邪智門』）のような詩句は、そのまま華岳の風景や花の雰囲気に通じている。

すでに華岳独自の感覚があつて行われている。それは、対象にぐつと近接してクローズアップする視点や、視覚を通じて空気の肌ざわりや触覚的な手ざわりまでものが感じられるような表現であり、たとえば師の一人であった竹内栖鳳の写実よりも、さらに

思はれ、思ふかの女よ」という一節が思い浮かぶ。上田敏の『海潮音』が出版され、青年たちの熱烈な支持を受けたのは、華岳十八歳の年であつた。明治四〇

ゆだねる華岳の清姫は、走りながら蛇と化してゆくのである（うしろになびく髪の形が、すでにそれを暗示している）。

思はれ、思ふかの女よ」という一節が思い浮かぶ。上田敏の『海潮音』が出版され、青年たちの熱烈な支持を受けたのは、華岳十八歳の年であつた。明治四〇

思はれ、思ふかの女よ」という一節が思い浮かぶ。上田敏の『海潮音』が出版され、青年たちの熱烈な支持を受けたのは、華岳十八歳の年であった。明治四十一年前後に豊かな実りを迎えた近代詩の数々は、若き画家の感性の根幹を形づくつたに違いない。今ここにないものへの強い憧れと、自らの感情のしたたりをうたう、「風のあゆみ、／静かなる午後の光に、「……」空の色やはづかに青みわたり／夢深き樹には啼く、空しき鳥」（三秋『邪宗門』）のような詩句は、木露風『廃園』）、「色赤き、赤色き花の吐息……」（北原白秋『邪宗門』）のよくな詩句は、そのまま華岳の風景や花の雰囲気に通じてゐる。